

2025 年 10 月 19 日 説教「知識のかぎを」

ルカの福音書 11 章 49～54 節

11 章は、後半からパリサイ人や律法の専門家との関わりについて語られ、イエス・キリストの厳しいお言葉が連なっていました。それは、さらに続きます。

1. この時代が問われる (49～51 節)

- ①神の知恵も (49)「**だから、神の知恵もこう言いました。『わたしは預言者たちや使徒たちを彼らに遣わすが、彼らは、そのうちのある者を殺し、ある者を迫害する。』**」

「神の知恵」とは、神からの知恵であり、知恵の結集です。イエスご自身の知恵と言っても良いです。知恵のお言葉は 51 節の半ばまで続きます。その内容ですが、主はかつての時代には預言者たちを遣わし、今の時代には使徒を遣わされるのです。ところが、彼らの語る神からのメッセージに反発する者たちは、メッセンジャーである預言者や使徒たちを迫害し、ある時は殺してしまう、というのです。

- ②預言者の血の責任 (50)「**『それは、世界の基が据えられるときから、流されてきた、すべての預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。』**」(新改訳 2017 年訳)

50 節と 51 節を新改訳聖書の二版、三版では、二節をまとめているのですが、2017 年度版では分けています。この 2 節だけは 2017 年度版を用います。

50 節ですが、そこには世界の始めのときから、神の言葉を語り告げられたこと。そのために殺されて流された預言者たちの血について、時代を経てはいても、その罪の責任を今の時代の者も負っていかなばならないと、言われるのです。

- ③アベルの血から (51)「**『アベルの血から、祭壇と神の家の間で殺されたザカリヤの血に至るまで』** そうだ。わたしはおまえたちに言う。この時代はその責任を問われる。」(新改訳 2017 年訳)

具体的な名も出されます。アダムの子アベルは信仰深い人でしたが、兄カインの妬みもあって、殺されてしまいました。また、祭司エホヤダの子ザカリヤは、偶像礼拝に傾いたヨアシュ王の命令により、石で打ち殺されてしまいました(Ⅱ歴代史 24:22)。アベルにしてもザカリヤにしても、神を慕う者たちでしたが、不条理にも殺されてしまいました。この責任は誰にあるのでしょうかとイエスは問われます。そして言われました。イエスの時代に生きる「あなたがた」、律法の専門家も、その責任を免れることはできないと明言されたのです。

2. 律法の専門家のしていること (52 節)

- ①わざわざ (52)「**『わざわざ。律法の専門家たち。』**」

「わざわざ」という呼びかけ方は、この章で 6 回目です。「わざわざだ、あなたがたは」と呼びかけて、ここでは「律法の専門家たち」と名指してい

ます。それは、この章において出て来る律法の専門家です。彼らは内側よりも外側のことに目を向けます。また、人々に負いきれない荷物を負わせながら、自分では荷物に触れようとしないと厳しく言われました。以下には、別の視点から、彼らの問題点がえぐり出されます。

②自分も入らず (52)「おまえたちは知識のかぎを持ち去り、自分も入らず、入ろうとする人々をも妨げたのです。」

律法の専門家たちは、律法についての知識の鍵を持っていました。鍵は閉まっている所に入るのには不可欠です。律法の知識の鍵も真理を知るためには不可欠です。ところが、彼らはその鍵を持ち去ってしまっているのです。しかも、問題なのは、そこに真理の道があることを認めずに、自分も入ろうとせず、さらには入りたいと願っている人が入ろうとすることも妨害をしているということです。

3. 律法学者たちの計画 (53～54 節)

①イエスに対する敵対 (53)「イエスがそこを出て行かれると、律法学者、パリサイ人たちのイエスに対する激しい敵対と、いろいろのことに ついてのしつこい質問攻めとが始まった。」

イエスは食事に招かれた、律法の専門家の家を出られました。本来なら食事を感謝しながら、御言葉を伝えておられるところだったのでしょうか。しかし、パリサイ人や律法の専門家に対して、イエスは言うべきことを伝えておかなければなりませんでした。それを受けて、これ以降、律法学者、パリサイ人たちは、イエスに激しい敵対意識を持つようになりました。そして、イエスについての荒捜しをしたり、意地悪な質問をぶつけたり、反対行動をするようになりました。

②いいがかりをつけようと (54)「彼らは、イエスの口から出ることに、 言いがかりをつけようと、ひそかに計った。」

彼らは、イエスのすること、言われる事の中で、突っ込み所があると、言いがかりをつけようと狙っていました。どちらに答えても、攻撃できるような態勢づくりをしました。たとえば、あの姦淫を犯した女を引き連れて来た時の、魂胆を思い出しましょう。このような人を律法では石打ちにするようになっているが、どうするかとイエスに答えを求めました。ここには罠がありました。石打ちにしなくて良いと言えば、律法違反だと言えるし、石打ちにしなさいといえば、日頃から愛を説いているイエスの教えと違っていると責め立てることができるように彼らは考えて臨んだのです。ところが、イエスは、「あなたがたのうちで罪がない者がこの女に石を投げなさい」と言われたのです。誰も彼女に石を投げる者はいませんでした。彼らの計略は失敗に終わりました。

しかし、彼らは様々な手段を使って、イエスを追い込むための計略は精力的に進めていくことになるのです。

《展開と結論》

今朝の聖書箇所の中から、52 節にある「知識の鍵を持ち去り」という部分に注目したいと思います。

律法の専門家は、当然の事ながら律法に通じていました。しかし、だからと言って、律法のコアを経験していたわけではありません。ニコデモがイエスの所に来た時の会話を思い出していただければわかります(ヨハネ 3 章)。また、律法の中の大切な二つ、第一に父なる神を愛すること、第二に隣人を自分のように愛することを正しく語った律法学者も、その律法を実践する方向には歩んでいませんでした。(ルカ 10 章)。すなわち、彼らが内側より外側のものを重視するという在り方は不動だったのです。そして、そうした律法の専門家は知識の鍵を持ち去って、自分も入るべき所に入らず、またそこに入りたい人が入るのを妨げていたのです。

実を言うと、律法の専門家はその鍵がどんなに素晴らしい価値があるのかを知らなかったと言っても良いのです。それでは、その鍵を用いて入ればどこに入ることができるのでしょうか。そうです。それは救いの道に入る鍵なのです。福音は旧約聖書の中にも隠されてありました。たとえばイザヤ書 53 章 5～6 節には「彼は、私たちのそむきの罪のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私達はいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた」とあります。これは、受難のキリストの預言です。贖いの主キリストの預言です。そのお言葉を解く鍵を律法の専門家は勝手に持ち去り、自分でもその意味をわからないままにしたのです。自分が羊のようにさ迷いやすい羊で、身代わりになってくださるのが、救い主であるイエスだと知り、信じればその人は救われるのです。もし、彼らがその鍵を用いてその扉を開けようと努めれば、自分ばかりでなく、彼の周りにいる人々も救い主に出会うことができたのです。

ところで、私達も律法の専門家と同じ弱さを持っていないでしょうか。「知識の鍵を持っているのは、聖書学者とか牧師でしょう。」と思いがやすいです。しかし、キリストを信じるすべての者は鍵を持っている筈です。福音を知ったのであれば鍵が預けられているのです。救いに与かり、救いの鍵を持っているのなら、それを自分のためにだけに用いるのではなく、救いの扉を伝えて、救いの部屋に、案内したいものです。繰り返します。私達は鍵を用いて入って来た者達なのです。「見よ。わたしは戸の外に立って叩く。だけれども、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしは彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」(ヨハネ黙示録 3:20)とある通りです。私達は、イエスと共なる食事にあずかっている者達です。折しも伝道の季節です。講演会も近づいています。福音の知識の鍵を用いていきましょう。またその知識の鍵は「真にすぐれたものを見分ける」(ピリピ 1:10)力ももたらすことも覚えましょう。福音の知識の鍵を確かめましょう。そして、それを取り出し、祈りつつ用いていきましょう。